

## マーケットからバーザールへ

——共同体と市場の二項対立を越えて——

安 富 歩

### はじめに

本稿では共同体と市場の二項対立という伝統的枠組を乗り越えるための方策を提案する。最初に小谷汪之による大塚久雄の共同体論批判を概観する。その上で Skinner [1964-1965] の中国の定期市と Geertz [1979] によるモロッコのバーザールについての古典的論考と深尾・安富 [2003] の黄土高原農村についての考察を論じる。最後に我々が「市場」と認識しているものは、マーケットというよりバーザールであるという主張を展開する。

### I 共同体／市場の二項対立

最初に、経済学者の金子勝の『市場』と倫理学者の大庭健の『所有という神話——市場経済の倫理学』という二冊の書物を取り上げる。金子と大庭はそれぞれ深い思索によって、個人主義的所有とそれに立脚する市場を正当化する論理が、「強い個人という仮定」あるいは「ミニ領主としてのデカルト的自我」に基づいた神話であることを明らかにし、市場主義を批判する強固な視点を確保した。

注目すべきは、このような近代「神話」を鋭く批判する二人の論者でさえ、次のような別の近代「神話」を共有している点である。まず金子勝『市場』（金子 [1999] iiiページ）は冒頭で次のように述べる。

近代社会あるいはそこに生きる近代人間は分裂に直面することになった。

近代以降、全ての人間が、自立性への要求と共同性への要求という分裂した要求を抱えるようになったからだ。近代社会以前は、家族を含む共同体の規制や慣行が生活の大部分を縛っていたが、共同体に縛りつける基盤となっていた土地や労働力に所有権が持ち込まれ、市場が共同体を侵食してゆくと、人々は徐々に共同体から切り離されてゆく。

大庭健『所有という神話——市場経済の倫理学』（大庭 [2004] 10-11ページ）もほぼ同様の議論を出発点とする。

商品生産が主流となる前は、経済は、司法・教育・宗教といった活動と未分化であった。……諸種の活動は、すべて共同体（ムラ）の長老たちの指導のもとで、ひとびとが分担し協力しあって遂行されていた。……各人において、共同体の成員であることの意味が低下してくると同時に、市場の荒々しい値動きは、共同体の絆をも容赦なく寸断する。……ものの生産・分配が「市場経済」として自律化していくプロセスとは、右のようにして共同体が衰退・解体していく過程であった。

両者はともに、共同体が市場によって解体されて近代が始まり、個人が自立性を確保する代償として共同性を失ったと見ている。この枠組に立って金子と大庭は、現代社会に共同性と自立性に引き裂かれた「近代的個人」を見出し、最終的に悲観的な結論に到達している。金子は同書の結論部分で「近代的人間の分裂は絶え間なく拡大している」として、「この社会は確実に暗くなっている」とおののいて見せる（金子 [1999] 100ページ）。大庭はこれほど明確には書いていないが、「本論は、陰々滅々とした泥沼に向かうことを余儀なくされている」と諦観しており（大庭 [2004] 165ページ）、この諦観は金子の悲観と同じところから来ているように見える。

このような共同体／市場の二項対立と、後者による前者の解体による近代的個人の成立という枠組は、大塚久雄に由来するもの見て良いであろう（大塚 [2000]）。大塚は、近代以前の社会では、共同体が土地と人間を封じ込めて一つの完結した単位となっていた、と考える。全体社会はその集合体としてのみ

構成される。個人同士の関係が直接とりむすばれるのは共同体の内部であり、さらに個々の共同体が単位となって全体社会が構成される。大塚はこのような共同体が、市場を通じた商品交換によって破壊されると主張する。大塚の議論の特徴は、商品経済の発展だけで共同体を破壊するに充分であり、共同体的紐帯を経済以外の力によって破壊する必要がないと見ている点である。また大塚は、前近代社会の形態を生産力の高さに応じてアジア的→古典古代的→ゲルマン的の三段階に分類し、しかもこれらを単線的な発展段階と見ている。

大塚の議論の問題点は、小谷 [1982] によって徹底的に批判された。小谷は大塚の共同体論には「前近代社会と近代社会とを対極的なものとして措定する考え方、すなわち前近代社会は一般に何らかの共同体的関係を基礎にもつものに対して、そのような共同体的関係を最終的に解体し、商品交換関係を基礎とするようになった社会が近代社会であるとする考え方がみられる。(小谷 [1982] 206-207ページ)」と指摘する。

大塚の「共同体」概念は、一九世紀ヨーロッパ近代思想のドグマをそのまま反映しており、「近代社会」の反対概念として理念的かつ価値選択的に構成されたものにほかならない。つまり、「近代社会」の固有の要素のうち、価値が高いとみなされたものすべてを反転させて、理念的に構成された虚像が「共同体」なのである。これを破壊して、「近代社会」を出現させるものとして、商品交換および市場が導入される。それゆえ市場と共同体は排他的なものとして措定される。

逆に市場(近代)を嫌悪するものは、往々にして共同体(前近代)に憧れ、そこに救済を求める。しかしこのような反応は市場と共同体の二項対立図式を維持しているという意味で既に近代主義的ドグマに汚染されている。

小谷はまた、大塚が依拠するマルクスやマックス＝ウエーバー、さらに、ウエーバーが依拠した資料・先行研究を検討し、大塚の議論が、それらの論考の持つ近代に対する批判的視線すら脱落させたものであることを立証した。たとえば晩年のマルクスは「事実誤認にもとづく原始共同体論」をささえとして、

インドにおけるイギリスの政策を「文化破壊行為」として批判する射程を獲得していたのに対して、大塚は後進諸国の伝統的社会機構を、工業化と近代化を阻む乗り越えるべき桎梏としか見ない。ウェーバーは、「私的なもの」(特にその基盤としての私的土地所有)と「共同体的なもの」(その基盤としての共同体的土地所有)との相克として、さらには前者による後者の克服として近代文明をとらえる、という一九世紀的な歴史認識にきわめて懐疑的であったのに対して、大塚はこのような歴史認識に、人類史的普遍性を承認してしまう。

小谷は大塚の共同体論をこのように批判した上で、強固な自我を確立した者同士によって形成される「近代社会」とそこにおける人間疎外状況、それに対して個が全体性のなかに位置づけられ束縛されるとともに、個と個の協力の場として形成される「共同体」、という対立図式そのものを相対化することで、歴史認識の全体性と思想性を回復させる必要を主張する(小谷 [1982] 114-115ページ, 191-192ページ)。

大塚の二項対立図式の仕入先は言うまでもなくマルクスである。マルクスの図式は大塚ほど単純ではないが、それでも共同体を前近代に、市場を近代に割り振るという構図は同じである。商品交換と共同体の関係については、『資本論』の以下の文章が頻繁に引用される。

商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で始まる。しかし、物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる。(中略) 交換の不断の繰り返しは、交換を一つの規則的な社会的過程にする。したがって、時がたつにつれて、労働生産物の少なくとも一部分は、はじめから交換を目的として生産されなければならない。(マルクス [1968] 118ページ)

この箇所はマルクスが共同体と商品交換を対立するものとみなし、また後者が前者を破壊するものと認識していたことを示す。すなわち、商品交換の構造化された市場と、人的紐帯の構造化された共同体とは、明確な二項対立の関係

におかれている。

カール・ポラニーは、人間と自然の制度化された相互作用を「実体的意味の経済」と考え、市場のみを考察する経済学を乗り越えるための重要な枠組みを提示した (Polanyi [1977])。このような実体的過程の主要なパターンとして、「互酬・再分配・交換」を挙げる。「互酬」は成員が相互に対照的に配置されている社会に、「再分配」は強い中心性を持つ社会にそれぞれ対応するのに対して、「交換」の全面的に展開するには、自動調節機構を持つ価格決定市場というシステムが前提となる (Polanyi [1957] 邦訳269ページ)。

この「互酬・再分配・交換」という三分類には、共同体と市場とを二項対立させる図式がひそんでいる。すなわちポラニーは、「互酬」と「再分配」を共同体にふさわしいものとみなし、「交換」、とくに価格が変動しうるような交換を、共同体的紐帯を破壊するもの、と考える。「変動価格での交換は、明白な対立関係を含む当事者間の態度によってはじめて得られる利得を目標とする。この種の交換につきまとう対立の要素は、たとえどんなに薄められていても、拭い去ることはできない。成員の団結の源泉を守ろうとする共同体であれば、食物のように肉体の生存に致命的にかかわり、したがって強い不安を引き起こしうることがらに関して、潜在的な敵対意識が発達することを許すことはできない。(Polanyi [1957], 邦訳275ページ)」。この見方は、贈与や再分配には潜在的にも敵対意識の含まれないことを暗黙のうちに前提している。日本においては大塚久雄が読まれなくなった時期と、カール・ポラニーが流行り出した時期が重なっている。これは大塚史学が説得力を失ったあとに、共同体／市場二項対立を維持する上で、ポラニーが大塚の代用品として機能したことを示唆している。

フランスの歴史学者フェルナン・ブローデルは、このようなポラニーの考えを強く批判する (Braudel [1979] 邦訳第II-1巻, 280ページ)。ブローデルは、ポラニーと違って「自動調節機構を持つ市場」という概念を拒否し、このような市場は頭で考え出された代物に過ぎないとする。交換という方法は人間の歴

史と同じくらい古く、必然的に市場を通じた交換も同じくらい古く、かつ普遍的である。また、十九世紀以降の発達した市場システムでさえ、自動調節機構を持つ統合された単層のものではなく、複雑な階層性と構造を持っており、しかも経済の全域を覆っているわけではない。その下には膨大な自給自足部門があり、その上には資本主義と国家権力がある。社会に埋め込まれた経済から、経済に埋め込まれた社会への大転換という見方は、あまりにも事態を単純化している上に、実際の歴史過程を無視している (Braudel [1979] 邦訳第II-1巻, 278-284ページ)。

小谷の指摘するように、前近代社会が共同体を基盤としており、市場がそれを破壊することで近代化が実現されるという見方は事実と反している。中国、インド、イスラムなどの文明社会では近代ヨーロッパの影響を受ける遙か以前から、発達した市場システムを持っており、個人と土地を封鎖する共同体などというようなものはほとんど観察されないからである。

市場というものを適切な形で考察の対象とするためには、市場／共同体の二項対立という図式を、徹底的に相対化した上で事実を観察し、思索する必要がある。金子勝と大庭健の書物がそれぞれ1999年と2004年に出版されていることを考えれば、この問題を過去のものとして葬り去ることはできない。

## II スキナーの農村市場共同体論

人類学の分野では、半世紀も前から、共同体と市場の二項対立がそもそも成立しないような、両者の混合した状況についての深い思索が展開されている。スキナーによる中国の定期市の研究と、ギアツによるモロッコのバーザールの研究がその代表的な成果であり、両者はすでに古典とも言うべき地位を占めている。

ところが、興味深いことに、両者とも市場と共同体の対立図式に言及しておらず、管見の限りでは、その後の両者に沿った研究もこの点を重視していない。つまり人類学者は、市場と共同体が混合したシステムについて深い考察を展開

する一方で、それが市場／共同体の対立図式を相対化するものであるという側面はほとんど意識していないのである。まずはスキナーの議論から見てゆこう。

スキナーは1949～50年にかけて四川省の成都周辺の農村でフィールドワークを行ない、定期市がこの地域の社会で重要な役割を果たしていることを発見した。スキナーは、定期市が経済的のみならず、広汎な社会的意味を持っているという主張を展開した。このフィールドワークから得られた知見を、他地域の資料と総合し、スキナーは中国農村市場のモデルを提唱する三本の論文 (Skinner [1964-1965]) を著し、中国学と地理学に根本的な影響を与えた。

戦前の日本人による一連の中国農村研究が明らかにしたように、中国の農村にはかつての日本の農村にあったような明確な共同体は見られない (旗田 [1973])。たとえばどの村に誰が属しているのか、どの土地がどの村のものなのかを示す明解な区切りがない。村の統合の象徴たる廟の祭りにしても、それを運営するのはボランティアであり、有力な「家」があってそれが祭を仕切るというわけではない。近代になって村の境界が徐々に明確化されてゆくが、その際に利用された境界は、たとえば作物の見張りを担当するならず者たちの縄張という周縁的な文化的資源であった。ならず者への作物の見張り料を農民から徴収する機構であった「青苗会」が、権力の側から税金などの徴収機関として位置づけられた地域では、ならず者たちの縄張がそのまま「村」という行政単位の境界として編成されていったのである。村はこれほどまでに境界のあいまいで茫漠としたものでしかない。

スキナーの提起した疑問は、村が共同体でないとしたら、一体どこに共同体があるのか、というものであった。スキナーはその答を定期市に求めたのである。

スキナーのモデルは、障害物のない完全な平面上に、村落が相互に等距離で並んでいると想定する。この場合、三つの村を頂点とする正三角形が二次元空間を埋め尽くすことになる。このような平面上に、スキナーは「市場町」を中心とする階層的な市場構造を想定する。農村市場には三つの階層がある。スキ

ナーはこれらを、下から順に「原基市場」「中間市場」「中心市場」と呼ぶ。

原基市場はその名のとおりに、市場機構全体の基礎となる最下層の市場で、村に住む農民が日常的に利用する。この市場に対して卸売の機能を果すのが中間市場、さらにその上が中心市場である。これらはすべて定期市であり、原基市場は十日に二回、中間市場は三回、中心市場は五回などといった頻度で開催される。

空間が一様であると仮定すると、原基市場町の影響範囲は、市場を中心とする円を描くことになる。このような円盤で空間を埋め尽くそうとすると、円盤が相互に重なり合う部分ができる。重複が最も少なくなるように配置し、各重複部分の真ん中を境界として設定すれば、それぞれの市場の機能が覆う範囲は六角形となる。市場町圏の分布を上から見れば、蜂の巣の表面のように見える。一つの原基市場圏の周辺には理想的には十八の村が位置する。

スキナーによる四川のフィールドワークでは、農民は「自分の市場」を認識しており、少なくとも理念型としては、市場圏への所属は排他的である。すなわち、人々は村に排他的に属しているわけではないとしても、原基市場圏には排他的に属しているというのである。この意味で原基市場は単なる経済機構ではなく、共同体の単位でもあるとスキナーは主張する。原基市場に対応する共同体を「原基市場共同体」と呼称する。農民の住む最小の共同体は、個々の小さな村ではなくこの原基市場共同体であるというのがスキナー理論の重要な主張点である。

1949～50年にスキナーの調べた成都郊外のある原基市場共同体には約二千五百家族があり、彼の住んでいた家の主人である林氏はそのほとんどの家の主人を知っており、その家族のことも相当把握していた。50才の農民は平均して三千回程度は原基市場に出掛けており、千回以上は茶館で一時間ほどお喋りをした計算になり、この程度の知識を持つのは難しくはない。これに対し、近くの村であっても、別の原基市場共同体に属する村の人のことはほとんど知らない。

原基市場共同体は共同体内で頼母子講が形成されたり、あるいは嫁のやりと



りをその内部で行なったりすることで強化される。また哥老会とよばれる一種の秘密結社もこれを単位に形成される、上述の原基市場共同体では、「清」と「泥」のふたつの結社があり、ほとんど全ての家はどちらかに属していた。これらは原基市場町で開かれる種々の市をシェアするかたちで取り仕切っていた。

寺廟や祭も市場共同体の結束を形成する機構となる。これらは原基市場の内部で徴収した資金や寄付で運営される。運営もまた共同体の有力者が中心となる。職業組合・娯楽・度量衡・民間伝承・方言なども原基市場を単位とする例が多く見られる。

尤も、市場共同体が中国全土で観察されるというスキナーの主張はその後の研究でサポートされていない。また、「共同体」と言っても、近世日本の村落共同体のような強固な結合と排他性を持っているわけではなく、はるかにゆるい漠然としたものである。この点はスキナーの主張をかなり割り引いて聞く必要がある。

しかしそれでも、少なくともスキナーの観察した四川の農村では、市場町こそがコミュニケーションの結節点であり、人間関係を形成するための行為が最も濃密に展開される場所となる。

ここで問題となるのが、市場と共同体の関係である。既に見たマルクス、大塚、ボラニー、金子、大庭をはじめとする多くの論者の主張するところでは、交換のための交渉や現金の支払という行為は、人間関係を不安定化させるはずのものである。これに対してスキナーは、市場町という交換が主として行なわれる場所を中心として共同体が形成されると主張する。

しかしスキナーは、どうして共同体を破壊する作用を持つ交換が頻繁になされる場所で、共同体を作りあげるタイプのコミュニケーションが高密度で生成されるのか、という疑問には答えようとしない。スキナーが挙げる論拠は、市場が開かれると人々は用がなくてもとにかく集まってきて、お互いに顔見知りになり、茶館などで延々とお喋りをつづけ、市場圏内のすべての家の事情についての情報交換がなされる、という点だけである。マルクス以来の伝統的な

「市場／共同体」の対立図式からすれば、スキナーが何の疑問も抱かずに、このような議論を展開しているのは不思議でさえある。

### III ギアツのバーザール論

クリフォード・ギアツのモロッコのバーザールについての有名な論文は、市場／共同体の二項対立を相対化する上で特に重要である (Geertz [1979])。ギアツは、バーザールにおいては、敵対的であるはずの交換を廻る交渉のなかから、共同性を生み出すような人間関係が生まれ、それが全体としてある種の秩序を創りだす、という議論を展開した。

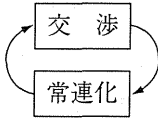
ギアツはまずバーザールにやって来る人々を「スーワーク *suwwaq* (市場参加者)」として把握する必要を主張する。その意図は、個々の市場参加者が担う具体的な役割以前に、そこに参加してコミュニケーションを行っているというその基礎的役割を重視するからである。目的が何であれ、ただの散歩であっても、とにかくバーザールという場に出現して歩き廻る人々の総体が、市場そのものの再生産されるための場を形成することになる。これらの人々が相互に取り結ぶ「関係」の入り組んだ構造物の上で、情報と物資のやりとりが行われる。

しかもこのようなやりとりの背後で人々は、さわがしいまでのお喋りを繰り返す。ギアツはこれを「おしゃべりな群集」と概念化した。このような噂の渦を背景として形成される人間関係の動的なネットワークの総体がバーザールそのものである。

人々間の相互作用には「交渉」と「常連化」という二つの層がある。交渉とは情報探索の具体的に行なわれる過程である。この交渉の場面で人々は、たとえば売り手と買い手という非対称な立場にあり、商品の価格・数量・品質を廻る情報交換と折衝を繰り返す。この場合、両者は本質的に敵対的な関係である、とギアツは言う。

一方でこのような交渉を繰り返すうちに両者の間に常連化が起きる。こうし

て両者の関係が強化されると、この関係を通じて交渉という情報探索過程が展開されることになる。つまり「常連化」は「関係をつくる行為」であり、「交渉」は「関係を実効化する行為」なのである。常連化と交渉は一方がもう一方に従い、しかも他方の変化を惹起するという次のような円環の関係にある。



ギアツ自身は明確に指摘していないが、この二つの層のタイムスケールが大きく異なる点が注意に値する。すなわち交渉というのはその場限りのやりとりであり、秒か分のオーダーである。ところが常連関係は場合によっては何十年と続くものであり、常連化の層の継続時間は交渉の層よりも遙かに長い。

モロッコのバーザールには、様々な出身地・文化・習慣・宗教・職業を持つ多様な人々が多様な行為を通じて関与しているが、それぞれの市場参加者が個人的に常連関係を構成し、そのように構成されたネットワークの構造化されたものとしてバーザールが成立している。このため、多様性が道理に叶った形で編成され、安定的な形をとることが可能となる。

つまり、各人がそれぞれに自分用のインターフェイスさえ構築できれば、バーザールの他のメンバーがどう行動していようと、一応はバーザールの運動に参画しうるのである。このような柔軟性が、ネットワークの多様性を維持する機構であると考えられる。

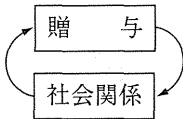
こうした人々の繋がりがありかたは、構成員と共有すべきルール of 厳格に定義されている組織と比較すれば、その特徴が明らかになる。たとえば近代的な取引所を考えてみよう。そこでは誰が会員であるかが明確に定義されており、共有すべき売買の方法は条文によってこれまた明確に定義されている。その上で人々は「自由」に取引する。一方、バーザールでは構成員が誰かはっきりせず、取引の方法は個々人の構築したインターフェイスごとにことなってる。前者にくらべて後者は短期的な取引効率こそ低いかもしれないが、柔軟性や多様

性は遥かに高い。どのような出自のどのような文化を持った人間でも参加できるという意味で、取引所に比べて遥かに自由でさえある。

このギアツのバーザル論で展開された、「交換のための交渉」と「顧客関係の形成」の相互作用は、「共同体における贈与」と「社会関係の形成」の間の相互作用と類似した構造を持っている。たとえばサーリンズは次のように言う。

物質的な流れと社会的関係は相互促進的に接合されている。ある特定の社会関係は、財の所与の運動を強制するが、ある特定のやり取りは——「同じ様に」——ある適当な社会的関係を示唆する。仲良しが贈与につながり、贈与が仲良しを生む。(Sahlins [1972] p. 186)

つまり、



という円環が、贈与の機能を表現する。

ギアツの観察したバーザルでも葬儀や婚礼などの儀礼を通じて、贈与と社会関係の相互作用が見られている。ギアツは、職業別かつ宗教別に形成される相互援助組織の活動の一環としての葬儀や祭に言及している。ところが、残念なことに、こういった共同体の活動が、商売を廻る敵対的交渉とどのように関連しているのかという議論は行われていない。

マルクスの共同体と市場の対立図式を前提とすると、ギアツの円環と、サーリンズの円環が両立することはできないはずである。つまり、もし贈与が人と人との関係をつくり出し、それが共同体を形成する基礎となるなら、その「共同体が果てるところ」では、そのような円環関係も消滅する。市場で展開される交換は、沈黙交易に代表されるように、人間関係から自由な、その場限りのやりとりであるはずである。現実にはそうでないにしても、市場交換は非人格性を促進するような力を持たねばならない。そうでなければ、交換が共同体

を解体することはありません。

この観点からすれば、ギアツの議論の暗黙の含意は、「共同体が果てるところ」にあるはずの交換の場たるバーザールで、このような関係形成の円環関係が見られる、という主張である。つまり、市場で見られる敵対的な交換のための交渉と、共同体を構成する贈与のための行為との双方が、ともに人間関係と相互促進関係を持つことになる。

明らかにこのモデルは、伝統的な共同体／市場の二項対立を棄却する性質のものであるが、ギアツもまたこの論点に言及しない。なぜ、スキナーもギアツもこの二項対立に言及しないのであろうか。また、なぜ、共同体と市場を対立させる伝統的な枠組に真っ向から対立するはずのこの論理を、ギアツとスキナーがいつも簡単に展開しえたのであろうか。

その理由のひとつは彼らが大塚史学の影響を受けていないことにあるのかもしれない。つまり、市場と共同体の二項対立をそもそも意識していない、という可能性がある。しかし、スキナーが原基市場圏への個人の排他的所属意識に奇妙なまでにこだわり、あるいはギアツが交換のための交渉を本質的に敵対的であると看做していることは、彼らもまた暗黙にこの二項対立を意識していることを示唆する。

最大の理由はおそらく、彼らが見た現実の様相があまりにも雄弁だったからであろう。つまり、モロッコのバーザールや四川の定期市では、観察者が共同的行为と市場的行为の対立など忘れてしまうくらいに、両者がスムーズに連結しているからではなかろうか。というのも、私もまた中国黄土高原の農村におけるフィールドワークで、同じような連結性を見出したからである（深尾・安富 [2003]）。

## V 黄土高原の村

深尾・安富 [2003] は黄土高原の村（陝西省榆林市米脂県楊家溝村）を舞台としたフィールドワークに依拠し、ギアツのモデルを拡張した議論を展開した。

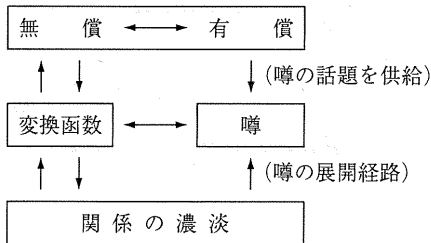
そこで論じた直接のテーマは、無償労働供与と有償労働供与がどのように村のなかで共存しているか、という問題であった。無償労働供与は労働の贈与であり、有償労働供与は労働と現金の交換である。

この村では、両者の労働供与方式が矛盾せずに並存する。ある人（A）が家を建てる場合、同じ村のなかのBは無償で労働を提供し、Cは賃金を貰って労働するということが起きる。場合によると、労働を提供した二十日のうち、十日は無償で十日は有償というように、一人の人間が双方の形態で労働することもある。

また、注目すべきは人々の噂のあり方である。たとえばある人がどこかの家族が家屋を建築する現場において有償で労働を提供したとしよう。すると、その人がもらった賃金のほか、その家を出た食事の内容やタバコの銘柄までが、克明に噂されることになる。

ところが何らかの経済的やりとりが、密接な関係にある人同士で行われた場合には、そこでのやりとりの内容は、噂の対象にはならない。具体的な事例で言うと、調査に行った我々が、滞在している家の女性につくってもらった布靴を履いて村のなかを歩き廻ると、頻繁に値段を聴かれるが、それに正面から返事をせずに「密接な関係だから」と返事すると、それ以上詮策されることがない。つまり、関係内部のやりとりについて、外部の者が噂することはない。

このような戦略的な労働供給方式の選択を整合的に理解するために、深尾と安富は次のようなモデルを提案した。



この図は次のように読む。ある家屋建築の場面を考えよう。労働提供者と受

給者は、双方の関係の濃淡を考慮して、どのような労働提供様式が相応しいか、無償か有償かそれらの中間か、を判断する。そして具体的に労働が提供されると、その結果が両者の関係の濃淡に書き込まれる。この場合、関係は遅いタイムスケールの層に属し、労働提供形態の選択は早いタイムスケールの層に属す。噂は、関係の濃淡と、労働提供方式を繋ぐ変換函数を常時調節しておくための役割を果す。人々の行為は、常にこの噂のなかでの評価に晒されるのである。

重要なことは、一方から一方への無償労働供与は、それが関係への書き込みという機能を果した段階で作動を終えるという点である。つまり、無償の労働供与を受けた側が、それを「負い目」とすることはない。

たとえば、AとBという二人の人物が居て、両者の関係が密接であり、AがBに労働を無償供与したという実績があったとしよう。このとき、今度はAが労働を必要とする事態が生じたときに、もしもBが何らかの事情で労働を提供できなかったとしたら、どうなるであろうか。

この質問に対してある村人は、次のように答えた。そのような場合には、BはAに気まづかったり、恥ずかしかったりはするが、それが関係の濃淡に深刻な影響を与えない限り、それで何もない。つまり、Bは両者の関係からすれば、当然、手伝いにゆかねばならないのに、行けないのが気まづく、恥ずかしいのである。「負い目」があるからそれ払拭せねばならないのではない。

興味深いことに、もしAとBの関係が悪くなったらどうなるのか、という質問に対してその村人は、「その時は、BのAに対する負い目が発生する」と答えた。BはAに相応の日数の労働提供義務を負い、もしも自分で行くのが嫌であれば、誰か別の人を雇ってAのところで働いてもらわねばならない。

両者の関係が悪くなった場合には、両者の過去のやり取りが読み出され、相殺されない部分が市場的な債権債務関係として再構成される。つまり、関係という長期記憶システムが作動しなくなった場合には、短期の市場的世界に記憶が読み出され、債権債務関係が生じるのである。

このことから、「贈与」と「負い目」に関する人類学の古典的議論に疑問を

挟む余地のあることがわかる。贈与を受けた側が負い目を感じ、それを払拭するために返礼をする、というあの議論である。これでは贈与がそのまま短期の層に属する債権債務関係を構成していることになる。贈与の主たる機能が人間関係という長期的な層への書き込み操作であるとすれば、その関係形成の結果、相手方に贈与をすべき状況が生じたので、贈与を行うと解釈しなければならない。「負い目」はあくまで短期の層の概念とすべきである。

このように、贈与と交換を両端に持つような、行動様式を考えて、それが関係と相互作用する、というモデルを考えれば、共同行動と市場的行動が並存していても、何も不思議なことはない。実際、楊家溝村で人々は、無償労働供与（贈与）と有償労働供与（交換）を戦略的に切り替えて行動している。ミクロレベルの構造をこのように構想すれば、ギアツやスキナーのモデルを整合的に理解しうる。

市場と共同体の二項対立、というテーゼとの関係から見れば、ギアツとスキナーと深尾・安富の議論は次のように整理することができる。

- ギアツは市場の敵対的な交渉の中に共同体的紐帯の形成を見いだす。
- スキナーは市場に共同性の中心を見出す。
- 深尾・安富は村落に共同性と市場性の連続体を見いだす。

上記三点は、市場と共同体の二項対立という根強い認識の枠組みを相対化する上で、共通する理論的意味を持っている。これらの論考の共通点は、共同性と市場性を併せ持った形で、関係が構築される点に注目している点である。

#### おわりに——マーケットという幻想

財（あるいはサービス）への需要と供給の差が価格を変動させ、価格が需要と供給を変動させるという<sup>マーケット</sup>市場という概念は、交換という過程から人間関係を排除するものである。人間関係は共同体の方へ押し出されており、市場はそういうものと無関係に成立していると観念される。

しかし、明らかにこのような想定は事実と反している。現代の発達した市場



経済においてさえ、全ての企業は顧客との人間関係を創り出そうと懸命に努力している。顧客情報の管理を怠る企業が生存することはできない。個人情報保護法を制定し、企業の顧客情報収集活動を抑制する必要があるほどに、企業は顧客との関係づくりに必死である。善良な企業は顧客と良い関係を創ろうとし、悪質な企業は顧客をハラスメントに掛けようとする。顧客は企業との良好な取引を繰り返すと、その企業を信頼し、親しみを抱き、その良い面を見るようになる。場合によっては一時期のマッキントッシュのように、顧客が企業の熱狂的ファンとなることもある。

経営学の開祖とも言うべきピーター・ドラッカーは企業の目的が利益であることをはっきりと否定した。利益は企業活動の目的ではなく条件に過ぎない。利益が出ない活動は継続し得ないという制約を与えるだけであり、企業の目的を規定するものではない。企業の目的の定義は一つしかない。それは、顧客を創造することである。顧客の創造に必要なことはマーケティングとイノベーションである。

マーケティングとイノベーションにより顧客との関係形成に成功すれば結果として利益が出る。利益が出なければその活動は維持できない。この意味で企業活動という社会変革活動にとって利益は重要である。しかし、それはプロ野球の球団にとって勝利が重要であるのと同じことである。勝つことは重要であるが、いくら勝ってもファンを失えば意味がない。利益が出たところで、顧客を失ってしまえばおしまいである。球団にとって目先の一勝よりもファンの気持がより重要であるのと同じように、企業にとって目先の利益よりも顧客との関係の方が重要である。直接に利益を求めて追求することは、結局のところ利益を生み出だす機構を壊してしまいかねない。企業は顧客をはじめ、関連する人々との関係の活発化をターゲットとしなければならない。(Drucker [1974] ch. 6)

ドラッカーの主張するように経済活動を捉えるなら、市場を価格と需要・供給で構成される「マーケット」と考えるのは不適切である。市場は現代資本制

社会においてすら、人と人とが関係構築と情報収集にいそしみ、激しいおしゃべりの喧騒のなかでやりとりが繰り返される「バーザール」だと考えたほうが現実に近い。

ドロッカーはカール・ポラニーなどの追い求めた「社会による救済」という概念を否定し、この信念そのものが既に破綻していると指摘する。市場がうまくいかない場合に、その救済を社会（本章の文脈では共同体）に求める構想がそもそも「市場／共同体」というありもしない対立に依拠していることにドロッカーは気づいている。それゆえ唯一可能なことは、仕事に知識を適用し、人々のコミュニケーションに働きかけ、組織をうまく運営するマネジメントの探求しかない、と主張するのである。

現代はインターネット化とボーダーレス化の時代である。この変化は経済をよりバーザール化させていると私は考える。なぜなら従来の国民国家によって守られた国民市場では、ある程度の均質性や制度的保護を期待することができたのに対して、ボーダーレスのインターネット市場では、さまざまな出自のさまざまな文化を持つ人々が直接に出逢うからであり、そのなかで自前のインターフェースを構築し、全体の秩序を形成していく必要があるからである。この姿は取引所よりも、モロッコのバーザールに近い。現代の諸問題についての考察は、この認識から出発すべきではなかろうか。

人々はボーダーレス化・インターネット化の進展により、世界がますますマーケットの支配するところになると考えている。しかし事実はそうではない。世界はますますバーザール化（より正確には脱マーケット化）しているのである。

コンピュータ関連の産業などのネットワーク性の強い先端的分野で、インド系・中国系の人々が活躍していること、あるいは中華圏・インド圏が全体として急速に成長しつつあることと、世界のバーザール化は無関係ではない。こういった文化圏に生まれ育った人々は、日本・西欧・アメリカ社会に育った人々に比べて、制度や共同体に依存することなく、独自のネットワーク資源を活用

してリスクを回避しながら生きていく技術にたけているのである。

百五十年前に西欧を中心とした世界システムに包摂された頃、日本は家と村落共同体を基盤とした強靱な国民市場を独自に作り上げていた。いわゆる近代化に迅速に対応し、短時間で列強に加わることができたのはこのためである。一方で日本人は国家の保護下でしか活動できず、国家権力の及ばない地域への移民は限られていた。

これに対して同じ時期の中国は、市場的なるものと共同体的なるものを混在させた個人主義的色彩の強い鄉村社会を基盤とし、流動性の高い活潑な市場経済を形成し、空前の人口爆発を経験していた。このシステムはしかし西欧型の近代国家システムとは全くそりがあわなかった。それゆえ国家としては劣勢となり、日本の侵略を受ける立場に立った。一方、人々は国境に頓着することなく世界中に移民し、各地に強力な華僑社会を形成した。

マーケット的なるものに整合的な社会を持っていた日本人は、二十世紀末期に至るまで、百年を超える繁栄を享受した。しかし、経済システムがコンピュータの衝撃によって脱マーケット化し、本来のバーザルの色彩を回復させるにつれ、構造的な不調に陥った。逆に、マーケットに適応しきれなかった中国社会は空前の繁栄を経験しつつある。

しかし、別に悲観することはない。我々は既に十分に安定した裕福な社会を形成しているからである。もはや金儲けなどというものに熱中しなければそれで良いのである。企業の目的が顧客とのコミュニケーション形成であり、利益が制約条件に過ぎないことを思い出してほしい。社会が活潑であるかどうかを、経済活動の水準だけで見るのは愚かである。社会にとってコミュニケーションの活性がすべてであり、経済はその制約要因に過ぎない。非経済的誘引によるコミュニケーション活性の向上を図る努力を惜しんではならない。経済を出来るだけ速く脱マーケット化し、バーザル化させる必要がある。経済的交換を社会的交換と密接に編み上げていかねばならない。それこそがバーザル化する世界経済での競争的地位を維持する最善の方法なのである。同時にそのよう

な努力は社会をより高潔なものとし、国際社会における高い道義的地位を我々に与えてくれるはずである。

### 参考文献

- Braudel, F. [1979] *Civilisation Matérielle, Économie et Capitalisme, XV<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> Siècle*, tome 2, Paris, A. Colin. (村上光彦訳『世界時間』1, 2, みすず書房, 1996年)。
- Drucker, P. F. [1974] *Management : Tasks, Responsibilities, Practices*, New York, Harper & Row.
- 深尾葉子・安富歩 [2003] 「中国陝西省北部農村の人間関係形成機構——〈相影〉と〈雇〉——」『東洋文化研究所紀要』第144冊, 358 (75)-319 (114) ページ。
- Geertz, C. [1979] “Sug : The Bazaar Economy in Sefrou”, in *Meaning and Order in Moroccan Society*, eds. by Geertz et. al., pp. 123-264, New York, Cambridge University Press.
- 旗田 巍 [1973] 『中国村落と共同体理論』岩波書店。
- 金子 勝 [1999] 『市場』岩波書店。
- 小谷汪之 [1982] 『共同体と近代』青木書店。
- マルクス, カール, マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳 [1968] 『資本論 第一巻 第一分冊』大月書店。
- 大庭 建 [2004] 『所有という神話——市場経済の倫理学』岩波書店。
- 大塚久雄 [2000] 『共同体の基礎理論』岩波書店。
- Polanyi, K. [1957] “The Economy as Instituted Process” in *Trade and Market in the Early Empires*, eds. by K. Polanyi, C. M. Arensberg and H. W. Pearson, The Free Press, Glencoe. (石井博訳「制度化された過程としての経済」(玉野井芳郎他編訳『経済の文明史』) 日本経済新聞社, 1975年)。
- [1977] *The Livelihood of Man*, ed. by Harry W., Academic Press, New York.
- Sahlins, M. [1972] *Stone Age Economics*, New York, Aldine de Gruyter.
- Skinner, G. W. [1964-1965] “Marketing and Social Structure in Rural China, (I)-(III),” *Journal of Asian Studies*, Vol. XXIV, No. I-III.
- 安富 歩 [2000] 『貨幣の複雑性』創文社。